

日本の里山で毎年実施している日本語・日本文化体験学習プログラム「サマーキャンプ in ぎふ」(米日教育交流協議会主催)は8年目を迎えました。7月5日から7月17日に実施した第1期は19人が参加しましたが、7月26日から8月5日に予定していた第2期は希望者が少なく残念ながら実施できませんでした。

ここでは、今年のサマーキャンプを振り返り、活動の様子をお知らせしたいと思います。

その前に「サマーキャンプ in ぎふ」の概要を記します。

目的: 海外に暮らし日本語学習中の子どもが日本の自然、文化、歴史に触れ、地元の人々と交流することによって日本語・日本文化を心と体で体感し、積極的に日本語を学習し、日本の生活習慣を習得しようとする意欲を芽生えさせる。

主な体験内容: 学校体験(第1期のみ)、禅寺でのミニ修行、ものづくり・食づくり体験、地元民家でのホームステイ、日本の子どもとの交流、自然の中での遊び体験、地場産業や史跡の見学



全校児童の前で自己紹介



楽しく交流できた中学生



中華料理を作りました

先生方や児童の皆さんに大歓迎していただけました。全校児童200人の前での自己紹介の場もいただきましたが、サマーキャンプの子どもたちが大きな声で日本語でスピーチができたことは立派だと思いました。中学校はお世話になるのが3年目ということもありましたし、この学校のある地域は過疎化が進んでおり、全校生徒数は17人ということもあり、生徒たちが主体的に交流しようという姿勢が見られ、サマーキャンプの子どもたちもすぐに馴染むことができ楽しい学校生活が送れました。高校にお世話になるのは今年で6年目となりました。先生方も生徒の皆さんもサマーキャンプの子どもとの交流を楽しみにしてくださっています。例年同様に生活環境科に受け入れていただき、調理や和装、育児などの実習にも参加でき、とても良い経験ができました。先述したように子どもたちは日本語での会話はできないことはありませんが、学年相応の読み書きをする力のある子は少なく、授業に参加することはなかなか難しそうです。しかし、同年代の子どもとの交流はとても楽しく、お互い



食事の作法を学ぶ

に良い刺激になったようでした。

寺院体験では、毎年臨済宗の寺院にお世話になっています。座禅や読経を体験するほか、禅寺での食事の作法を教えてください、仏教の起こりや寺院の歴史についての講話も聴かせていただいたりしました。15分間の座禅はもちろん大変そうでしたが、寺院では正座をする機会が多く、それが辛そうな子どもが目立ちました。日本でも椅子に座ることの多い生活をする家庭が増えましたが、和室で会食するような機会はあると思われれます。そんな時に困らないように正座や食事のマナーなどをしっかりと身につけておくことは大切です。

ホームステイでは、地元揖斐川町や周辺市町の民家にお世話になっています。中には農業や寺院を営む家庭もありますし、4世代が同居している大きな家庭もあります。ホストファミリーは各々で工夫され、家族と一緒に楽しめるような計画をしてくださるので、サマーキャンプの子どもたちは大喜びでした。ホームステイから帰ってきたときには各々の家庭で体験したことを楽しそうに語り合っ



一番人気の川遊び

日本語の学習意欲を芽生えさせるために ～「サマーキャンプ in ぎふ2013」を振り返って

米日教育交流協議会(UJEEC)・代表 丹羽筆人

学年別には小2年から小4までが各1人、小5が2人、小6が4人、中1が1人、中2が5人、中3が2人、高2が1人、高3が1人と幅広く、10歳の年齢差がありました。小2と小3は本来は参加資格から外れていますが、昨年の参加者の弟妹でもあり特例として認めました。在住地域別には、カリフォルニア州、ワシントン州、ミシガン州、メキシコ、日本が各3人で、メリーランド州、オハイオ州、イリノイ州、テキサス州が各1人でした。ワシントン州、ミシガン州は兄弟2人での参加者が含まれ、メキシコの3人はすべて兄弟です。日本在住の参加者は数年間の米国での生活を経て帰国し、インターナショナルスクールに在籍している子どもが

2人と保護者の日本転勤に帯同され、アメリカンスクールに在籍している子どもです。このように日本に在住していても外国語で学んでいる子どもには参加資格を与えています。なお、日本語学習中であることを参加条件としていますが、家庭で両親と日本語で会話する子どもは19人中2人のみであり、母親または父親と会話するときのみ日本語を使うという子どもが目立ちました。一方で家庭でも日本語を使わない子どもも2人いました。個人差はありますが難しいことではなければ日本語で聞いたり話したりできる子どもが多かったといえます。

サマーキャンプでの活発な交流と多彩な体験

今年の第1期では、4日間の学校体験、2泊3日の地元民家でのホームステイ、1泊2日の寺院体験のほか、工場見学、地元のスポーツクラブとの交流、川遊びやハイキングなどを実施しました。

学校体験では、小学生と中学生は地元揖斐川町立の学校に、高校生は地元の県立高校にお世話になりました。小学校は初めてお世話になる学校でしたが、

ました。

工場見学は、自動車部品工場と壘製造工場を訪問しました。アメリカで走っている車の部品やよく目にする栄養ドリンクの壘がキャンプ地の地元で作られていることを知ることができました。しかし、機械の音がうるさく暑い工場環境には顔をしかめる子どもも目立ちました。自分たちの便利な暮らしはこのような人々に支えられていることを感じてほしいと思いました。

スポーツ交流では、地元の小中学生のバレーボールチームと一緒に汗を流しました。自己紹介では恥ずかしがっていた日本の子どもたちも、運動をしているときにはとても楽しそうな笑顔を見せていたのが印象的でした。

子どもたちの一番人気は川遊びでした。宿泊施設の近くには大きさの異なる川が多数あります。今年は例年より梅雨明けが早く、猛暑が続きましたので、川遊びはとても気持ちよかったです。子どもたちは魚を取ったり、飛び込

みをしたり、泳いだりしてはしゃいでいました。このように美しい自然と触れ合う機会は日本の子どもでもなかなかありません。サマーキャンプの子どもにとって忘れることのない貴重な体験となったことでしょう。

日本語が上達した子どもたちに再会したい

今年のサマーキャンプを終えて感じたことは、指示したことを参加した子どもたちがきちんとこなせたということです。集合時間を守ることができましたし、大きな声であいさつやお礼をすることもできました。食事の準備やと片づけも素早くできました。みんなが仲良くできチームワークもよかったです。最後に楽しかったという感想を述べ、また来年も参加したいという声が多かったことも嬉しかったです。楽しかった思い出を胸にして日本語学習に取り組み、来年に再会したときにはさらに上達した日本語力を見せてくれることを願っています。

執筆者のプロフィール: 河合塾で十数年間にわたり、大学入試データ分析、大学情報の収集・提供、大学入試情報誌「栄冠めざして」などの編集に携わるとともに、大学受験科クラス担任として多くの塾生を大学合格に導いた。また、現役高校生や保護者対象の進学講演も多数行った。一方、米国・英国大学進学や海外サマーセミナーなどの国際的企画も担当。1999年に米国移住後は、CA、NJ、NY州の補習校・学習塾講師を務めた。2006年に「米日教育交流協議会(UJEEC)」を設立し、日本での日本語・日本文化体験学習プログラム「サマー・キャンプ in ぎふ」など、国際的な交流活動を実践。さらに、河合塾海外帰国生コース北米事務所アドバイザーとして帰国生大学入試情報提供と進学相談も担当し、北米各地での進学講演も行っている。また、文京学院大学女子中学校・高等学校北米事務所アドバイザー、名古屋国際中学校・高等学校アドミッションオフィサー北米地域担当、デトロイトりんご会補習授業校講師も務めている。

◆米日教育交流協議会(UJEEC) Website: www.ujeeec.org